晴雨の記

中里恒子

文藝春秋刊

時雨の記　奥附

昭和五十二年十月二十日第一刷
昭和五十三年三月十日第六刷

定　價　一千三百圓

著　者　中里恒子

裝幀者　青山二郎

發行者　樫原雅春

發行所　株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三番地　郵便番號一〇二
電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷　精興社

製本　中島製本

製函　加藤製函

萬一落丁・亂丁の場合はお取替えいたします
© Tsuneko Nakazato 1977 Printed in Japan

時雨の記

题字＝著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二階の書齋を下りて、庄田は、しんとした家の中を歩きまはつた。敷き替へたばかりの灰色の絨毯の上に、點點と、猫の足跡がついてゐる。老猫の三毛は、池のまはりの濕つた土の上を歩いては、すぐ、居間の敷物の上で足の裏を拭くやうにして、食堂の隅の椅子の下に座りこむ。

三毛は、小さい時から糞尿の癖がわるくて、三毛の好む場所へ砂箱をおいても、ほかの場所へ尿をする。細君は、泥足を拭くのと、砂箱を移動させて、三毛の氣に入るやうに置きかへ、そこへ三毛をすりつけて、糞尿を敎へるのだが、わかつたやうな振りをするだけである。

「牝の三毛は緣起がいいとか言つて、左官屋さんが持つて來たのですけど、やつぱり似るのかしら、職人衆が、ちよつとその邊で用を達すでせう、猫だつて、見てるのだわ、」

庄田は、元もと、猫ぎらひだが、面倒臭いから、細君の猫可愛がりを、默認してゐる。

猫も老いて來ると、拔毛がひどく、方方に、猫の毛が拔け落ちてゐるのは、うすぎたない。猫がそばへ來ただけで、毛がまつはりついた。

午後から、下阪中の古い友達の壬生がたづねて來る。壬生は、話したいこともあるし、夕食をともにしたいと言つて來た。

「そんなら家へ來ないか、全部出拂つて、僕ひとりだ、夕食はお辨當ぐらゐで我慢しても、話をきくには、家の方が氣らくだらう、」

「さうだな、さうしよう、」

庄田は、壬生の話といふのは、ビジネスではなく、個人的のことと直感した。小學校からの仲間で、壬生の家が沒落するまでは、同じ町內の一番大きい、古い屋敷であつた。

請願巡査の住んでゐる、石の門の脇の小家屋の前を通ると、巡査は、晝は出勤してゐるが、細君が庭に向つて、いつも縫物をしてゐた。子が無いせゐか、壬生の友達が出入りするたびに、じろつと見据ゑる。押しボタンがついてゐて、あやしいと思へば、すぐ母屋へ通報する仕掛になつてゐると、壬生が言つた。物乞、ゆすり、さういふ一理窟書いた刷り物など持つた連中が、時折來るので、巡査の家で、その應對をする。そこで喰ひとめられないと、玄關へゆく前に、ボタンを押す。あとは、書生なり、庭番なりがひき受ける手筈ださうだ。

壬生は、さういふ家の次男で、男ばかり四人の兄弟であつた。庄田には、妹が二人ゐたので、壬生の家では、庄田の家へ遊びにゆくことを、あらかじめ禁じてゐた。中學生の壬生に對しても、

女といふものと接近することを、いましめてゐたらしい。……
家族が出かける前、庄田は、言つた。
「壬生が來ることになつてる、いい辨當でも頼んでおいてくれ、」
「まあ不意だわね、ぢやあたし、出かけるのやめませうか、あなたは、壬生さんによくお世話になるでせう、」
「いいよいいよ、お前は、惡妻で通つてるのだから、かまはないよ、」
「あなたが賣りこんだのよ、惡妻惡妻つて、」
「本當ぢやあないか、壬生のとこも、相當惡妻だから、かまはんよ、ゆつくり夕食をとつて、かまはずにやつてくれ、」
「ぢや、惡妻らしくしませう、三毛には、牛乳かけて、ひき肉の鑵詰と、かつぶしを混ぜて、蠅帳に入れておきます、」
元來、妻は客ぎらひで、酒肴のとりなしなど出來ない女である。たまたま喋べり出すと、客の見さかひもなく、關係もないことをとめどなく話しつづけて、相手を、不愉快にするのが、落ちであつた。
庄田は、正面から惡妻と言ひたてて、自分のつきあひには、相伴させない。
卓の上に、最中が鉢に盛つてある。茶の仕度も出來て、大きな魔法瓶が、ワゴンに乘つてゐた。
やがて、壬生孝之助が訪れた。

壬生は、庄田と同年だが、頭髪が灰色がかり、そのせゐか、顔色は、桃色に冴え冴えして、ひと頃より若若しく見える。
「近く、ヨーロツパをひとまはりして來る、公用のほかに、私用もある、」
「なんだ、そんなことか、」
「……まあ、三ケ月だから、ちよつと、旅行にしては、長いや、簡單に言ふよ、君にも隱してゐたひとがゐる、そのことで、君には迷惑でも、知つて貰つて、なにかの時、力になつて欲しいんだ、」
庄田は、庭の方に顔を向けたまま、
「たとへば、事故とか、いやなたとへだけれど、聯絡とるとか、あとあとのこととか、」
「それもある、しかしまあ、なにか起つてしまへば、それまでだ、僕は、家を出ようかと迷つてゐる、」
「えつ、それは切羽つまつた話だな、いつしよにならうつて言ふのかい、」
「いや、反對してる、向ふは、とめにかかつてるよ、だが……僕はやうやく今になつて、ほんとに生きてゐる氣がするんだ、反對させないつもりでゐる……」

堀川多江を知つたのは、いや、まだ知つたとは言へない、見ただけだつたから、それは、たぶ

ん、あのひとも二十そこそこの頃で、僕は勿論、獨身だつたから、何十年前になるかな、そんなことはどうでもいい？　いやさうではない。それから僕たちが再會したのは、あのひとが四十すぎ、僕も五十を過ぎてゐた。

そんなに長い月日の間、僕たちは、全然、離れてゐたのに、どこにどうしてゐたかも知らずに、お互ひの運命は、べつべつに人生を辿つてゐたといふのに、僕は、二十そこそこの頃に見たあのひとの面差しを、忘れてゐなかつたのは、やつぱり、一つの緣といふものではないだらうか。

――

その日、勤務先の會社と關係深い社長の通夜で、大森の高臺の屋敷へ行つた。ごたごたしてゐる中で、燒香がはじまつたので、僕も、末席に列なる爲、離れの大廣間の方へまはつた。歸りは、庭の方から出るといふことなので、外套や帽子をもつて、離れの渡り廊下を通つてゆくと、入口のひと間に、三人ばかりで、客の持ちものを預つてゐた、若い女のひとが、

「どうぞ番號札を、」

と聲をかけた。僕は外套と帽子を渡し、思はず顏を見合せた。

目禮した顏の、產毛の生えた臘のやうな頰と、濃い髮の毛を束ねた無表情の顏に、一瞬きざした赤味もすぐ消えて、帽子がつぶれないやうにと、もちものを、急ごしらへの臺の上に乘せるべく立ちあがつた。

ひよろひよろした躰つきを、わたしは漠然と、なにか非常な重味に耐へてゐるひとのやうな、

理由もない哀感を覺えて、思はず手を差しのべてしまつた。

「わたしが乘せませう、」

そのひとは首を振つて、そのまま、ほつそりした躰を伸ばして荷物を片づけ、また、そこに默つて座つた。わたしは、そのまま通夜の席にゆき、會社の者といつしよに、奥との聯絡に、廣間の出口を往つたり來たり、下つ端らしく雜用を手傳つたりする度に、そのひとが、ぢつと、何處を見るでもなく、伏眼勝ちに座つてゐるのを、何度眺めやつたらうか。なんとなく、氣になるひとであつた。

あとできけば、そのひとは、社長の身內の資產家の三男坊かなんかに嫁いだひとで、平常は、良人の好みで洋服ばかり着てゐる、快活なあかるい性質だと言はれて、わたしは、あてがはづれたやうに、がつかりしたものだ。なんだ、そんな幸福な若奥さんなのかと、やきもちに似た、つまりその良人にさういふ氣さへ感じた。けれども、他人の奥さん、それだけで、もうわたしは、すつかりそのひとに關心を失くしてしまつた。その頃は、人妻は、高峯の花、まかりまちがへば、不義密通、驅落、心中と、ろくなことにはならない。ひと眼で好きになつたくらゐのことが、どう具體的にならう筈もないではないか。

しかし、第一印象といふものは、おそろしい。わたしは、堀川多江が、四十すぎて、その間にいろいろの出來ごとがあつて、身の上が變つてゐることなど、思ひもよらずに、昔のままの、臘のやうな頰が、ふつくらしてゐるのを見たとき、はつと思つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あのひとだ、あのひとに違ひない、」

わたしたちが再會したのは、知人の息子の結婚式の席でしたよ。從つて、あのひとは紋付を着て、派手やかに粧つてゐたのに、わたしには、何十年か前の、あの故しれぬ哀感が、まざまざと蘇つてねえ。

偶然なことに、テーブルが向ひあつてゐたので、わたしは、話しかける機會を窺つてゐた。どういふわけか、主人らしいひとも居ず、わたしも、妻を同伴しなかつたので、ひとりの男と、ひとりの女を向ひあはせて、何組かのカップルの中に入れたのは、係りの組み合せの氣轉だつたにすぎないが。

戰後の帝國ホテルで、これだけの客をしたのは、製藥會社をもつてゐる知人の、顏の廣さもあり、家柄のよさもあり、招かれた客も、すぐに、どこそこの誰彼とわかる顏ぶれが多くて、わたしも、財界の端に顏を出してゐる關係で、デザートになると、早速、三、四人の知人と、話し合ひながらも、あのひとが、いつ、席を立つかと、氣が氣ではない。

そのうち、立ち上つて、主人公の方へ行きかける氣配だつたので、わたしは、友人をおいて、いそいであのひとのそばへ行つた。

「お忘れかと思ひますが、以前、大森の……」

わたしは、名刺を出した。

「壬生孝之助さまで……はい、大森は伯父の家でございますが、まだ嫁いでまもなくの頃で、」

「お通夜の席で、廣間においでになつた、お忘れでせう、當然です、わたしは覺えてをりました、」
「申しわけございません、若い頃からのぼんやり者で、失禮いたしました、」
「……お送りいたしませう、どちらへでも、」
わたしは、有無を言はせず、そのひとに寄り添つてクロークへゆき、そのひとがコートを着てゐる間に車を呼び出して、押し込むやうに乘りこませた。我れながら、强引だと思つたが、今、ここで手離したら、手がかりがなくなるといふ性急な氣で、たうとう、思つてもみなかつた犯人をつかまへたやうな態度に、すらすらとなつてゐた。
本當のことには、本氣になる。
商賣、交際、無論のことだが、女に對して、わたしは、こんな親切めいたことを、臆面もなく押賣りしたことがあつたであらうか。
「東京驛で結構でございます、」
「お荷物がおありだし、お送りしてはいけませんか、」
「そんなことは……でも、大磯でございますから、」
「大磯ですか、それではやつぱり駄目ですな、もつとも駄目なことはありません、お送りしませう、」
「いいえ、電車の方が、らくでございますので折角のお志を無にするやうでございますが、」

「……」
「ありがたうございました、」
わたしは、突然、またも、飛んでもないことを口走つた。
「大磯のおところには、明日、お伺ひしてもよろしいでせうか、」
多江は、おそれとも、怒りとも思へるやうな表情で、一瞬、眼を見張り、
「どうして、明日お出でになりますの、」
「どうしてつて、」
「おもしろいことを仰言いますわ、大磯の山側の方で、古いところでございます、」
「おもしろいことでせうか、わたしの言ふことは、どうも、をかしい男だと、」
「率直で、珍らしい方だと思ひました、こちらこそ失禮いたしました、」
ぱつと車を下りて、わたしの車が走り出すまで、舗道に立つてあのひとは見送つてゐた。わたしは、引き返したいやうな氣になつた。そして、よし、明日は行く、さうきめた。明日は、日曜日である。
雨でも風でも行くと、きめてしまつた。
思ひたつたら是が非でもといふことは、人間、なにかとありますよ、釣好きが川で果てたり、ギャンブル狂が、女房を質においてもといふ眼のいろの變り方、わたしは、庄田君も知つての通り、男のくせに小さい時から、いろんな稽古ごとをやらされた。水泳、柔道、茶、繪畫　書、一

つぐらゐものになるだらう、暇があるのはいかん、怠惰はいかん、車夫馬丁でもいい、一番の馬丁になれといふ主義で、びしびしやられたものだ。

ところが、長兄の定之助は、弟三人とは區別された存在でね、幼兒から別室で育てられ、水泳はしたが、柔道で、耳でもつぶしたらいかんと、させなかつたし、茶と書はしたが、繪畫は、どういふわけか習はなかつたね、その代り、兄の爲の家庭教師が住みこみでゐて、學校の勉强は勿論、外國語も、英獨をやらされてゐた。醫者になるわけでもないのに、何故獨逸語をやつたのかわからないが、恐らく、父親の學問好きの犧牲だらうか。學者と言へば、むやみと尊敬してね、關係方面の學者を手厚く後援してましたよ。

家の跡を繼ぐ長男は、すでに幼兒から、一種の帝王學のやうな、特別の場に座る人間として躾けられてゐたから、わたしのやうに、學校の勉强をきらつて、君たちと、いたづら遊びに餘念なく熱中する、溢れるやうな野放圖な性格ではなかつたね。

きちんと、わくの中で、最上に仕立てられて、それを守り得た、やつぱり抑制の利いた男だと思はないか。君たちは、兄に出會ふと、硬直して、神妙に振舞つてゐた。つまり、目下の者を、平等に扱ふ、特に、誰が好き、これが嫌ひと、自己を出すことを禁じられ、ひとでも、ものでも、それについての喜怒哀樂を露骨に表現することは、小さい時からしなかつたよ、いはゆる八方丸く穩かに取締る風格ある餘裕を、どんな場合にも失はない人間として、躾けられてゐたから、到底、僕たちの、おもしろい遊び相手ではなかつた。

わたしは、兄のやうな人間にはなりたくなかつた。わるい奴だと言はれても、したいことはかまはずやつて見る、失敗しても、やりたいことはやつた方がおもしろい、さういふ、慾望に滿ちた生き方にあこがれたものだ。

まあ、自分に關係のない話は、一應おあづけだ、とにかく、再會した翌日、わたしは、あのひとに會つた嬉しさだけで、わくわくと會ひに行つてしまつた。

會つてどうしようなんてことは、考へなかつた、昨日會つた、今日も會ひたい、それだけのことでねえ。どうして昨日會つたから、また今日も會ひたいといふのがをかしいのか、わたしは合點がゆかない。

そりやあ、會ひたくないひとには、幾日會はなくてもいいのさ、けれど、堀川多江とわたしが出會つたのは、最初も偶然、再會も偶然なんですよ。

ところがそのあとは、偶然なんてものではない、わたしは、會ひたい衝動にかられて、それが、常識に反しようが、多江が、どんな境遇にゐるのかもわからずに、ただ、會ひたいから行つたのです。

大磯の驛で下車すると、妙に、あたりが古風で、こんなところにゐたのかと、それだけで、あのひとが、なにやら隱れ住んでゐるやうな、感慨に沈んだねえ。

堀川多江に、良人が存在することなんぞ、念頭になかつた。あのひとは、昔、あの大廣間の一隅で、ぼうつとひとりで座つてゐたときのまま、この大磯のどこかでも、ずつとひとりで座つて

ゐる感じなのだ。自分に都合のいい考へ方だけで、わたしは、あのひとを見てゐる。

これは惡童時代からの、わたしの勘でね、ここに蛇がゐると思ふと、きつとゐた、とぐろを卷いてゐた。いやあな豫感がする、すると、その日、父親が急死したと學校に迎へが來た。だからさ、わたしは、多江が待つてゐると、勝手にうきうきして田舍町を歩いた。

ガードをくぐつて山の方へ向つた。その線路沿ひの通りに、小體な魚屋があつたので、堀川さんといふお宅は、ときいたのだ。これがすぐ當つた。

「堀川さんですか……この道ずつとゆくと、流れがあつて、その前に、手入れをしてゐない古い大きな屋敷があります、その横を山の方へはひると、竹藪があつて、新しいお宅が工事中です、その奥です……新しい家の地所も、元は、堀川さんのお庭でした、」

きかないことまで敎へてくれたので、わたしは、せかせか歩き出した。心臟がどきんどきんするので、深呼吸して、流れのふちの枯野菊など眺めやつて、もう、何度か、來たことのある道のやうに、落着いて歩いていつた。

小さい門が開いてゐる。

山椿の花が散り敷いてゐる。

門の扉がこはれてゐて、一枚立てかけてある。これは不用心だ、なほさなければいけないな、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com